

DOKU-GAKU 勝手にチョイス!!

1Q84

1949年にジョージ・オーウェルは、近未来小説としての『1984』を刊行した。

そして2009年、『1Q84』は逆の方向から1984年を描いた近過去小説である。そこに描かれているのは「こうであったかもしれない」世界なのだ。

私たちが生きている現在が、「そうではなかったかもしれない」世界であるのと、ちょうど同じように。

(「BOOK」データベースより)



C a c c o

「天吾」と「青豆」というふたりの男女の名前を冠した章が交互に繰り返され、徐々にふたりの行動や思いがリンクしていく。村上春樹の小説と言えば「僕」が語る一人称小説（この「僕」がひどく魅力的なのだ）というイメージだが今回の小説は三人称。どうなるかと思っていたのだが、全く今までと違和感はない。相変わらず読みやすく、登場人物の心のあり方もよくわかる。小説にとって読みやすいということはとても大事だと思う。そして、すらっと読めるにかかわらず深みがある。これが理想。村上作品はそれを十分満足させてくれる。

高速道路の梯子段を下りて行った女（青豆）は、そこから月のふたつある世界へと入り込み、予備校の数学教師である男（天吾）は、編集者をつつんで17才の女子高生（ふかえり）を売れる作家へと作り上げていこうとする。

小学校の同級生だったがそれ以降会うこともなかった青豆と天吾に、ふかえりの存在が接点を作る。振り返ってもらうことを期待せず、ただ天吾を思い続ける青豆。ふたりは会うことができるのかできないのか。

村上作品の「僕」は常に受動的な男性だ。その気もないのに事件に巻き込まれていく。天吾は全く今までの「僕」を引きずっているが、「1Q84」のもうひとりの主役、青豆は実に能動的だ。受動的な「僕」のファンであったわたしだが、この青豆の凛とした行動力が大好きだ。好きな人を好きと言い、嫌なことを嫌という。納得しなければ行動せず、孤独であることを恐れぬ。作中に宗教の教祖から「君は宗教だ」と指摘される件があるが、孤独であることを恐れなければ自身が宗教にもなれるかもしれない。誰かに理解されたいという気持ちは植えつけられたように誰の心にもあるような気がするが、青豆はその気持ちを自分自身で消化することができるようだ。

「約束された場所で」（元オウム信者へのインタビュー）を読むと、かれらは一様に出家してからの、同じ価値観の中での暮らしは暮らしやすかったと言っている。現実社会では、理想を描きながらもはみ出してしまった者たちがみつけた場所だったはずなのに、道は大きく歪んでしまった。理解しあえる友があつて師と仰ぐ人がいる場所が暮らしにくいわけがない。そんな場所を青豆は決して外に求めない。ひとりで生きていくことをよしとし、自身の内面を友とする彼女は、確かに「宗教」だと言ってもいいかもしれない。

ところで、小説の中で天吾はふかえりの応募小説をリライトする役割を果たすが、この役割を天吾に与えた経緯には「約束された場所で」「アンダーグラウンド」という2冊の本で元信者と地下鉄サリン被害者の方たちにインタビューをし、かられの話す言葉を自身の書く言葉に置き換える作業を行った村上春樹自身の体験が関係しているように思えてならない。これもリライトと言ってもいいのではないか。その作業で村上春樹が得たものを天吾もまた得たのではないかと思う。

「1Q84」という本の感想は、もっと違う側面からも書くことができると思う。1Q84年という別の世界にスポットを当ててもいいし、宗教というテーマを切り口にしてもいい。そして再読すればまた違う注目点を見つけるだろうと思う。

高速道路を降りて行くときにみつける蜘蛛。逃避行の前になぜか気になるゴムの木。タマルという男性の存在。心に残るシーンはたくさんある。わたしが買った「1Q84」は今誰が読んでいるのかわからないが手元に返ってきたらもう一度読んでみようと思っている。

○「1Q84」を読んでオウム真理教関連本を読んだので簡単に書きとめます。

約束された場所で	村上春樹	元信者8人へのインタビュー。「ひょっとしてこれはオウムがやったのかもしれない」と最初のインタビューイは語る。絶対と信じていたことから「ひょっとして・・・」と疑い始める。そのときの心境を想像する。
アンダーグラウンド		サリン事件の被害にあった方たちの出生、生い立ち、現在の家庭環境などひとりひとりの周辺が丁寧に描かれている。いつもと同じ電車に乗った人、たまたまいつもとは違う行動をとった人。人生というのは複雑に入り組んでいる。それなのになぜかある地点に向かって収斂するように事件に遭遇する。誰が事件に遭っていてもおかしくなかった。再読。
慟哭 —小説林郁夫裁判—	佐木隆三	坂本弁護士事件犯人はオウム真理教ではないと信じオウムを救おうと私財を投げ打って入信した林被告。なぜ見抜けなかったのか？という問いはあまり意味を持たない気がする。結果が最悪であったとしても多分信じるとはそういう事だ。
オウム事件はなぜ起きたか 魂の虜囚	江川昭子	上下巻。オウム裁判傍聴記。著者はオウム事件で度々テレビに登場。「朝まで生テレビ」を当時夢中で見た事を思い出す。

健

CaccoさんからDGチョイスで回ってきた本。村上春樹の作品を読むのは初めてだ。今までには訳の分からないものを書く作家の印象を持っていたが最初のつかみやネタの組み込み方など文章も読みやすく興味が途切れないよう周到に伏線を張っているのはかなりのストーリー・テラーであると考えを新たにした。

作品は「青豆」「天吾」の二人の物語が章ごとに交互に語られる。二つの物語は互いにリンクしている部分があるものの交わりそうで交わらないまま全篇を貫いており初めは話が小刻みに変わるのでどかしく思ったがすぐ気にならなくなる。あらすじを簡単に書くと

「青豆」はスポーツ・インストラクターだが裏の顔は暗殺者という女。

「天吾」は予備校の数学教師だが小説家を目指している男という設定。

二人は小四の時に同級生だったが「天吾」は家の職業を恥じ自ら同級生と距離を取り、「青豆」は家の宗教活動を疎まれ同級生から疎外されていた。一度だけ天吾が青豆をかばったことがあり青豆は天吾に想いを寄せるが転校して離れ離れになる。

二人を再び結びつける接点となるのが「ふかえり」という不思議少女だ。オウム真理教をモデルにした組織の実態を暗示した「空気さなぎ」という「ふかえり」の小説のゴーストライターとなった天吾。組織の実態をあばきリーダーの暗殺を目論む青豆。同じ組織に関与したことでそれぞれの活動に巻き込まれ存在さえも脅かされることになる。そして青豆はいつしか自分の認識していた世界が微妙に異なっているのに気づきこの世界を「1Q84」と名づける。

タイトルはジョージ・オーエルが1948年に執筆した「1984」に由来している。内容は近未来(1984)、核戦争後の世界を独裁者が密告・盗聴・監視による市民生活(思想・結婚など)を徹底的に管理する社会の話でスターリン体制時のソ連を暗示しているとも言われた作品だ。近過去小説というからには過去に起きたことが題材となる訳で。「1Q84」には1984年当時の事件、社会情勢が描かれているがとりわけオウム真理教が鍵になっている。オーエルの「1984」との関わりは2冊を読んだ限りではよくわからなかったが、しいて言えば宗教やテロ活動など一方的な価値観による被害、警察・マスコミが一体化して作る冤罪について警鐘する意図があったのかも知れない。

「1Q84」はストーリーが主ではなく登場人物のそれぞれのセリフ、行動の中に愛情、SEX、暴力、宗教、表現など哲学的なものを抱え込んでいてこちらの方が重要に思え、読者としては様々な切り口で読める作品と思う。この作品は物語としては結着していない部分、謎を多く残しているが自分としてはこのまま終わってしまうのもありと思っている。組織を操っているリトル・ピープルなるものとの決着が陳腐なものに終わるような気がするのと、登場人物のそれぞれの主張・思いはある程度、書き尽くされていると思われるからだ。ただタイトルから想像すると最低BOOK3(10月-12月)、BOOK4(1月-3月)が書かれる公算は強いと思う。また刊行された2冊での評価はしにくい作品であり作者がライフワークといっているように他の作品と合わせての評価をすべきかもしれない。